

大学・短大研究紀要における「食生活」研究動向について

—— 1987～1994年 ——

大久保 洋 子

I 目的

我が国の食生活は中国や西洋の食文化を島国という特殊な環境の中で巧みに取り込み、そのまま受け入れるのではなく、日本風に変化させて日本独自の食文化を作り出してきている。食料となる作物の栽培から、食品の保存加工、調理内容など幾多の変遷を経て、江戸時代にいわゆる日本料理が完成したと言われている。そして明治の西洋化と第二次世界大戦の食糧難と経済成長による飽食、グルメから昨今の健康志向による食事のあり方へと変化してきた。それらに伴う様々な問題点を多くの研究者が研究を重ねている。民族学・考古学・歴史学・生活学等多岐にわたる分野で研究されている。今回は大学・短大が出版する研究紀要（論叢や論集を含む）に掲載された「食生活」に関連する研究論文を対象として、それらの研究の傾向を分析し、今後の研究の方向付けおよび教育の資料を得ることを試みた。

II 方法

多くの研究誌の中から大学・短期大学紀要（論集、論叢を含めて紀要とする）を取り上げ、それらに収載された論文から「食生活」に関する動向を調査対象することとした。

紀要論文の検索には学術情報センターがオンラインで提供する日本家政学会データベースを用いた。さらにこれまでの研究論文分析資料、『日本調理科学会誌』および日本調理科学会における「口頭発表論文」について

も検討を加えた。

III 結果および考察

1. 先行研究について

これまでに「食生活」に関連する研究論文の分析は『家政学雑誌』や『調理科学』などで行われている。『食と調理学』（石川寛子他著）には家政学会誌が60%を越える食物関連論文で占められていることを示し、同学会から分派した『調理科学』（第1～14巻、1967～1971年）について分析している。それによると調理研究を(1)方法論に関する研究、(2)調理操作や調理過程に関するもの、(3)機器についての研究、(4)調理による食品の成分、形態、性状の変化に関するもの、(5)調理による嗜好性の変化に関するもの、(6)供食論といった摂取に関する研究、以上6項目に分類し、その経時的変化について考察している。(6)が食生活に関連していると思われる項目である。全論文数132件のうちこの項目に含まれる論文数は8件であり、この時代の『調理科学』における「食生活」関連の研究はきわめてわずかである。¹⁾

次に古賀菱子氏の「私の考える調理学」（『調理科学』Vol.20, No.4 シンポジウム記録）中における『家政学雑誌』『調理科学』における論文内容をみると8項目に分類している。すなわち①調理操作・加熱条件、②品質・組織・素材、③栄養・食品成分・献立、④香・味・色、⑤嗜好、⑥衛生・保存、⑦食料費・食物史、⑧測定・分析方法である。この場合は⑦が食生活関連として扱ってよいと思われ

る。1968年～1977年を前半とし、1978年～1986年を後半として2誌について分析をしているが、「食料費・食物史」の出現率は全体の約5%であり、『家政学雑誌』は前半より後半の方が少ない傾向を示している。²⁾

杉田浩一氏の「家政学研究の推移・動向(1979～1987)食物学」(『日本家政学会誌』Vol.39, No.5, 1988)では第29～38巻に収載された、論文数1080のうち、食物分野は報文413、ノート72、資料44であり、全掲載論文数に対して食物分野論文数は46.3%と高い値を示した。その研究手段として①基本物理量の測定、②化学的手法、③物性・レオロジー測定、④生物学的手法、⑤官能検査法、⑥統計調査的手法、⑦文献調査(食物史、食生活史、食文化に関する古典の解析など)の6項目に分類し、主要な研究の流れとして①米および炊飯について、②でんぷんについて、③小麦粉について、④食物繊維と栄養成分について、⑤動物性食品、とくに卵、魚肉について、⑥食品物性について、⑦嗜好成分と食味評価について、⑧調理機器その他についてとし、8項目にまとめている。研究方法として文献調査が取り上げられており、今後の展望に「ノート、資料として提出されることの多かった文献調査、社会調査的な手法が今後の期間にはより重要視され、実験結果と組合わされて「人間生活」における食の観点から、より深く広い視野にたった研究が発展していくことを期待したい。」と述べている。³⁾

また佐藤真弓氏の「『家政学雑誌』における報文数および報文内容分析」(『日本家政学会誌』Vol.42, No.11 1991)によれば被服学と食物学が論文の大多数を占めている。⁴⁾

ごく最近の参考資料として桑畑美沙子氏の分析データ「『家政学雑誌』における食文化関連論文の分析『風俗』・『生活学』との比較」(1996、11、17 食文化研究大会)がある。『家政学雑誌』に収載された食文化関連

論文数は1980年から急激に増加し、1995年時点ではほぼ全論文数の4～5%を維持している。件数としてはこの15年間に72件という結果を得ている。

以上の先行研究において『家政学雑誌』と『調理科学』、『風俗』、『生活学』について「食物学」「食文化」「供食・摂取」「文献」などにおける動向を把握できた。しかし「食生活」をキーワードとしての分析はみられなかった。また、動向分析の項目も研究者により異なり、これらの研究の分析項目についても検討が必要である。『家政学雑誌』『調理科学』2誌による上記の分析では、全論文数の約5%を占めており、実験系の論文に比してかなり少ないということが出来る。研究論文の発表誌としては他に大学、短大における紀要がある。紀要は研究論文数も多く、分野も多岐に渡るので大学・短大における紀要の掲載論文について「食生活」研究の動向をみることを本研究の目的とした。

2. 分析対象資料について

日本家政学会のデータベースを用いて検索を行った。現在このデータベースは学術情報センター・オンラインサービスを通じて検索を行うことが出来る。データベース入力には1987年から始まり、日本家政学会シソーラスの分類コードによる入力が行われている。『日本家政学会文献集』に記載された論文も入力されている。従って1962年からの記録であるが、1987年を挟んで入力システムが異なっている(採録対象の拡大化)ので、本研究では1987年～1994年までの分析を中心として行った。収載件数は1997年9月30日現在115,511件となり、家政系の論文検索には最適なものであるといえる。家政学という非常に幅ひろい範囲を表1に示したようにコード化している。食生活分野のコード番号は157である。入力内容は論文題名のみである

が、入力者は調査対象論文に実際にあたって、内容を分析し、コードを選択する。論文題名のみでは研究内容が不明確な場合でもコードにより検索者は判読することが出来る。出来れば論文題名のみでなく2、3のキーワードも入力されていると理想的である。現状では論文題名に多くのキーワードを入れて作成すると検索者はより目的を達成できる。というのは、自然語検索が可能となるからである。例えば「日本料理におけるあえもの」というタイトルの場合であると、日本料理とあえものみでの検索となり、内容がみえてこない。文献研究なのか、時代はいつなのか、料理方

法なのか、アンケート調査なのかなど不明な部分が多くなる。

そこで「江戸時代における料理本『料理物語』に記載されているあえものについて」にすると江戸時代・料理・料理本・料理物語・あえものにより具体性がでてくる。従ってこれからの報文は論文内容のキーワードを組み込んだタイトルを各自で決定することが望まれる。

1996年現在の状況は日本家政学会による発表では食物分野の対象誌は67件、大学紀要255件となっている。しかし、対象誌は本研究検索によると更に30件ほど増えている。

表1 データベース分野コード

code	大分類	中分類	code	大分類	中分類
001	共通	職業、資格、身分	140	家政教育	教育一般
002		年齢、家族	141		家庭教育
003		統計、調査	142		家庭科教育
004		情報、メディア	143		家政学教育
005		地域、民族	144		生涯家政教育
006		歴史、時代	145		教育実践
007		度量衡、企画	146		家政教育研究
008		施設、制度	149		教育その他
010		測定、計測	150	食物	食物一般
011		現象、物性	151		食品
012		気象、気候	152		食品栄養成分
013		身体	153		微生物
014		心理	154		調理、加工
015		疾病	155		栄養
016		物質、物	156		測定、評価
020		総合	157		食生活
110	原論	原論一般	159		食物その他
111		研究方法	160	被服	被服一般
112		学説	161		衣生活、被服心理、服装生活
113		思想	162		服飾意匠、色彩
114		家庭環境	163		服飾美学、服飾史、民族服飾
115		社会環境	164		被服構成
116		外国家政学	165		被服衛生、生理
117		学会	166		被服材料
119		原論その他	167		染色、加工
120	経営	経営一般	168		被服整理、管理
121		労力管理	169		被服その他
122		時間資源	170	住居	住居一般
123		家計	171		住居史
124		消費者行動	172		住生活
125		消費者問題	173		住居管理
126		生活設計	174		住宅問題、住宅政策
127		生活保障	175		住居計画、デザイン
128		女性問題	176		室内環境、設備
129		経営その他	177		住宅生産、構造、材料
130	家族	家族一般	178		住環境、都市、農村
131		結婚	179	児童	住居その他
132		離婚	180		児童一般
133		死別	181		児童発達
134		世帯	182		児童保健
135		家族	183		育児、保育、教育
136		老人	184		児童文化
139		家族その他	185		児童福祉
			186		児童臨床
			189		児童その他

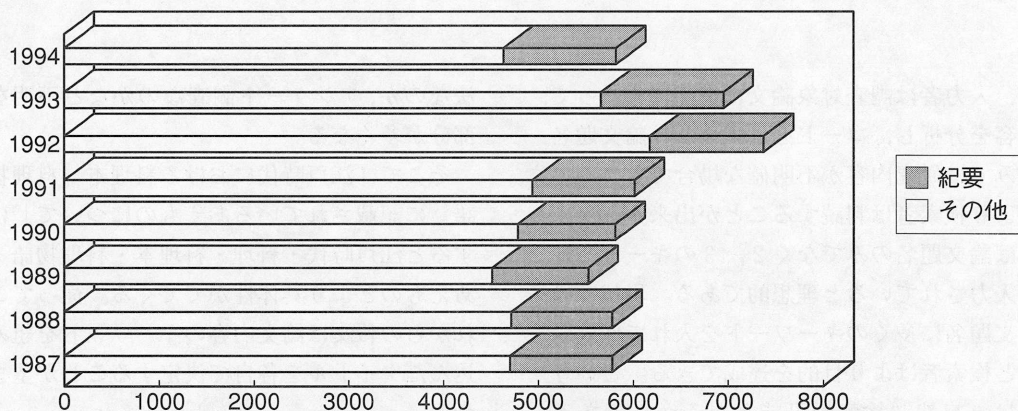


図1 全論文数に対する紀要の割合

食生活分野だけであるから食物分野としてはもっと増加していると思われる。食生活分野の対象誌は本調査では74誌に上った。

3、大学・短大研究紀要の動向

① 採録紀要数は表2に示したように1992年から70冊をこえている。登録全紀要数は154冊を数えている。「食生活」関連記載雑誌数を参考として併記した。雑誌数は27～36冊であり、年代による傾向はなく全体としての雑誌種類数も74種であった(表2)。

表2 採録紀要・雑誌種類数

年	1987	1988	1989	1990	1991	1992	1993
紀要	67	61	58	65	56	77	73
雑誌	27	36	27	34	30	36	34

② 日本家政学会データベース論文数と紀要論文数およびコード157論文数について表3に示す。全論文に対する紀要論文数の割合

表3 全論文数と紀要論文数

97.9.30現在

年度	全論文数	コード番号157	紀要論文数	紀要(コード157)
1987	5762	361	1078	110
1988	5760	334	1061	107
1989	5519	323	1027	104
1990	5803	400	1042	115
1991	6006	384	1101	107
1992	7372	387	1221	125
1993	6949	401	1296	130
1994	5810	351	1205	102

を年度別に表したのが図1である。1990年の17.9%から1994年の20.7%とほぼ同じ割合であった。1994年が増えているが今後の傾向をみないとこの分野の件数が増加するとはいえない。

③ 紀要論文数に占める「食生活」論文数の割合を、図2に示す。紀要論文数は「1990年まで1000件台であったが1991年に1101件、1992年からは1200件台と増加傾向にあるが、コード番号157に該当する論文は変化が見られないので紀要における全論文数の割合は減

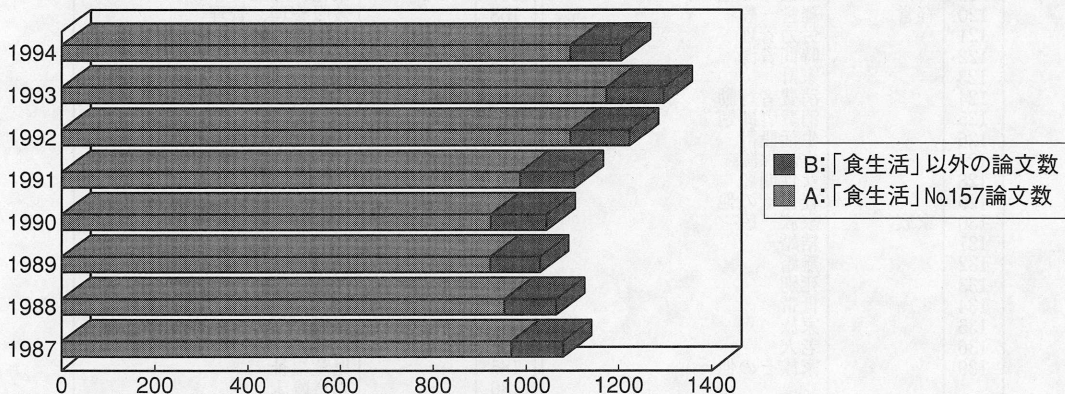


図2 「食生活」論文の割合

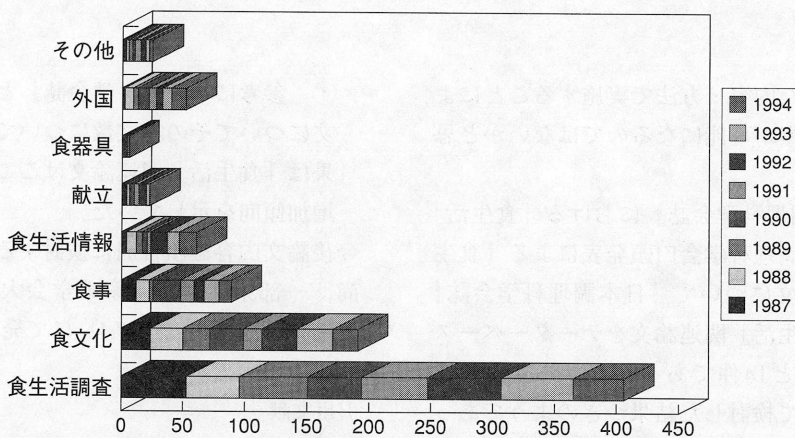


図3 紀要「食生活」内容動向

少傾向を示した。

④ 大学・短大研究紀要に記載の食生活関連論文動向

紀要記載論文の「食生活」関連論文の動向をみると前記の表1にみられるように、全文献数は1987年の5762件から1993年6949件と約1000件増加に対してコード番号157「食生活」分野は348件から386件とわずかに38件増加を見ただけである。そのうちの紀要論文数は105件から119件であり、14件の増加にとどまり、紀要における食生活関連研究は1987年からあまり変化なく記載されていることといえる。

次に紀要論文内容を八項目に分けてその動向をみたものが図3である。八項目の内訳は(1)食生活調査、(2)食文化、(3)食事、(4)食生活情報、(5)献立、(6)食器具、(7)外国、(8)その他である。その結果(1)食生活調査が圧倒的に多く、件数としては1990年の33件から1989年の50件までの間であった。勤務先の女子学生を対象としての調査が比較的多い傾向にある。次にあげられるのは(2)食文化分野であり、1991年の12件から1993年の27件である。食文化の内容は「油料理の変遷」(1987)のような文化的なもの、「新潟県の郷土食に関する研究(第20報) 雑煮について(その2)」のように一つのテーマを積み重ねて考察しているも

のがある。これは紀要論文の特徴ともいえるものである。また、今回の解析はあくまでも論文題名からの判断に基づくのでこの論文が雑煮の調査であることは想像出来ても、調査に分類せず、郷土食ということで食文化に分類している。この論文をどの分野に分類するかは非常に判定が難しく、論文そのものを読んでも調査が入っていれば単純に調査であるとはいきれない論文は多々ある。かといってそれを食文化・調査・情報などと該当項目すべてに入れると動向は見えてこないもので、今回は少し、独断を入れて判定していることを断っておく。また食文化分野には文献調査たとえば「古典料理研究、伊達家年中行事記録について」などがある。(3)食事項目には「外食の料理内容に関する研究」など(4)食生活情報項目は「家庭の高度加工食品使用の実態とその導入の検討」、(5)献立項目は「食生活に関する一考察、年代・住環境別の副食傾向について」などのように分類を行った。年度別のきわだった傾向は見られず、ほぼ毎年安定した状態で研究がなされている。(1)食生活調査研究が多く、特に女子大生・男子学生・中学生・高校生・高齢者・主婦等を対象とした実態調査が多い。大学・短大でそれぞれの研究者が独自の判断のもとでアンケート内容・調査方法を行っている。このように毎年実施されていることを考えると目的

別に統一した内容・方法で実施することにより、比較考察が可能になるのではないと思われる。

4、『日本調理科学会誌』における「食生活」関連論文と調理科学会口頭発表による「食生活」関連論文について『日本調理科学会誌』記載の「食生活」関連論文をデータベース検索をすると14件であった。そこで学会誌を全部当って検討した結果つぎのようであった。

1968～1977年	16件,
1978～1988年	22件,
1989～1996年	44件

内容はやはり調査研究が多く、文献研究、器具についての研究などであった。大会発表論文は1985年から行われており、「食生活」関連論文発表は

1985～1990年	52件
1991～1996年	123件

であった。1990年以降発表論文は確実に増えており、発表教室も独立して設定されている。『日本調理科学会誌』の掲載論文は実験系の論文が主流を占めており、従来から調査や文献資料系の論文は少なかった。しかし、口頭発表論文は増加しているので、今後この分野は増加するものと思われる。

IV まとめ

① 日本家政学会のデータベースを用いて大学・短大紀要（論叢・論集を含む）を資料とし、「食生活」関連論文の動向を検討した。

② 紀要に収載された「食生活」関連論文数に関してはここ十年に際立った変化はみられなかった。

③ 紀要に収載された「食生活」関連論文内容を8項目に分けて動向を見た結果は、アンケートなどによる状況調査が多く、ついで「食文化」系の研究であった。

④ 参考に『調理科学会誌』と大会発表論文についてその論文数について検討した結果は「食生活」関連論文はここ5年の間に増加傾向を示していた。

今後論文内容を項目別に検討する予定である。尚、一部第49回日本家政学会大会、および食文化研究部会（1997.4）にて発表した。

引用文献

- 1), 石川寛子他, 食と調理学, 弘学出版, 33～36, 1984
- 2), 古賀菱子, 調理科学, Vol 20, No 3, 1986
- 3), 杉田浩一, 家政学会誌, Vol 39, No 5, 129～133, 1988
- 4), 佐藤真弓, 家政学会誌, Vol 42, No11, 11～22, 1991